小学校第１学年２組　国語科学習指導案

[redacted]小学校
指導教諭 [redacted]先生
教育実習生 [redacted]

1.　日時：平成29年10月４日（水）　第４限（11：35～12：20）

2.　対象：第１学年２組児童（29名）

3.　場所：１年２組教室

4.　単元名
こえに だして よもう（全９時間）

5.　教材名
「くじらぐも」（光村図書 １年下）

6.　単元の目標
○語のまとまりや会話文（「　」）を意識し、声に出して読むことができる。
○場面の様子や登場人物の行動について想像を広げながら、その様子が分かるように声に出して読むことができる。
○お話の中から自分のお気に入りのところを見つけて、書き抜くことができる。

7.　単元の評価規準

観点	評価規準
国語への関心・意欲・態度	①物語の世界に浸り、豊かに様子や気持ちを想像しようとしている。 ②工夫して音読する活動に意欲的に取り組もうとしている。
話す・聞く能力	①自分の考えを、伝えたい方に向いて、適切に伝えることができる。 ②話している人の方へ体の向きを変えたり、頷いたりしながら聞いている。
書く能力	①登場人物の立場に立って台詞を想像し、話しているように吹き出しに書くことができる。 ②「」の書き方を学び、会話文をマス目の中に正しく書くことができる。
読む能力	①語のまとまりに気を付けて音読している。 ②場面の様子や登場人物の気持ちを想像し、それらが伝わるように読み方を工夫している。
言語についての知識・理解・技能	①平仮名と片仮名を正しく読み、書くことができる。 ②新出漢字を正しく読むことができる。

8.　児童観
本学級の児童は、楽しく学習に取り組み、自分の考えを進んで発表する子どもが多い。国語の学習においては、教師の範読を聞きながら教科書の文字を指で追っていくこと、学級全員で合わせて声に出して読む一斉読み、登場人物の役に分かれてペアや３人程度のグループで読む役割読みを経験している。また、日々の学習を踏まえて、宿題として音読をしている。
例えば、「おむすびころりん」（６月）や「おおきなかぶ」（７月）の学習では、絵本などで触れ合った経験のある子どもが多かったことや、ひらがなの学習途中であったことから、文章を読みながら声に出すよりも、耳で聞いて覚えたものをそのまま口にする子どもが多かった。「おむすびころりん すっとんとん」とリズムに乗ったり、「うんとこしょ、どっこいしょ」と腕を動かす動作をしたりしながら、力を込めて読むことができた。
そして、「ゆうやけ」（９月）では聞いて覚えるのではなく、ひらがなやカタカナを指や目で追いながら音読する姿が見られた。場面分けや場面の状況を整理したり、登場人物の気持ちを想像したり、挿絵に会話文を考えて書き込んだりする活動を行った。登場人物の心情を考える手立てとして、自分自身の経験と重ね、「新しい服を買ってもらったら、どんな気持ちになるか。」と問いかけ、そこからきつねの子の、新しいズボンに対する思いを、各々が自分を登場人物に当てはめ、「早く友だちに見せたいな。」「友だちは何と言ってくれるかな。」「毎日着たい。とっても嬉しい。」など、進んでイメージを広げることができていた。また、きつねの子・くまの子・うさぎの子に役を分かれて、簡単な身振り手振りを入れての役割読みの活動も経験した。
しかし、文章の読みの状況には個人差がある。すらすらと文字を目で追いながら声に出して読むことができる子もいる一方で、一文字ずつを拾うように読みあげる子や、一斉読みになると途中で見失い、読めなくなってしまう子もまだ多くいる。（そこで、本単元での学習から、支援策として、文字や文の認識、音読に特に課題のある子ども３名に対し、画用紙をラミネートしてカード状にしたものを与え、授業中の音読や宿題時に活用させている。これは、他の文をできるだけ遮り、１文のみに注目しやすくする効果を期待し、自分で読む部分にずらしながら音読していくことで集中して言葉や、１文そのものに向き合えると考えられる。）
以上のことから、声に出して単に「読む」という動作に加えて、句点や読点に注意して言葉のまとまりに配慮したり、場面や登場人物の様子や気持ちを思い浮かべて読んだりしていくには課題が残っている。さらに、第１学年による語彙数の少なさから、「うれしい・たのしい・よかった」、「かなしい・いやだ・さみしい」といった、大きな枠組みのなかでの表現に留まってしまうことが多いため、気持ちを表す表現を広げる支援も、意識していきたい。

9.　教材観
本教材は、本学級の子どもたちと同じ、１年２組の子どもたちが登場する。場面設定も体育の授業中であることから、実際の子どもたちの姿と重なる部分が多く、親しみやすい。しかし、これまでの既習の物語教材で活用してきた、現実の世界での自らの経験と重ね合わせることで登場人物の心情に迫ることとは異なり、雲（くじらぐも）と会話をしたり、上に乗って空の旅をするという、物語の幻想の世界に入るという、これまで自分が経験したことのないことをイメージで体験することを、心情を捉える手立てとする。一気に風が吹いて大空に舞い上がり、くじらぐもの上で歌ったり

踊ったりお話したりと想像の世界で遊び、再び自然と現実の世界に戻ってくるという体験を、本教材を通じて子どもたちは経験することとなる。

「空に浮かぶ雲に乗ってみたいな。」「空の上でこんなことがしてみたい。」といった子どもが抱く様々な思いを膨らませ、空の旅の想像を楽しく広げていくことが可能である。

文章の表現は、子どもたちとくじらぐもの会話が、生き生きとリズムよく進みながら展開されており、行動の主体や対応関係が、「○○が…しました。」や、「○○が～すると、□□も～しました。」というように、誰が動作を行い、誰が真似をしたのかなどが、明確に捉えられるようになっている。先生と子どもたちがジャンプをする場面では、「天までとどけ、一、二、三。」という掛け声や、それに対してくじらが「もっと たかく。もっと たかく。」と応援する。ここでは、同じ台詞が繰り返されており、状況や心情を読み取り、表現方法を考えながら音読していく活動として扱いやすい。

したがって、本教材は、場面の様子を想像しながら、登場人物になり、それらが伝わるように音読発表会を行う学習に適していると考えられる。

10. 指導観

本単元は、学習指導要領第1・2学年の「C読むこと」の内容「ア 語のまとまりや言葉の響きなどに気を付けて音読すること。」、「ウ 場面の様子について、登場人物の行動を中心に想像を広げながら読むこと。」、「エ 文章の中の大事な言葉や文を書き抜くこと。」を受けて設定している。

これまでの物語の学習に加えて、ただ文章を声に出して読むのではなく、場面の様子や登場人物の気持ちを想像し、それらが伝わるように読むことをめざしていく。そこで、本単元の学習の入口では、導入の段階で学習の出口である「くじらぐもの音読発表会をしよう」を提示し、学習の筋道を子どもと一緒に確認する。また、学習記録に沿って、単元全体の学習計画を確認したうえで、毎回の学習の初めには黒板上でのめあての確認、終わりには三段階（◎,○,△）の振り返りを行うことで、見通しを持って、安心して取り組むことができるようにする。

「くじらぐもの音読発表会」に向けて音読活動を重ねていくにあたり、登場人物に同化し、物語の幻想の世界にいかに、入り込むことができるかが大きく関係してくる。そこで、イメージしやすくするために、各時間で該当する部分の挿絵を拡大掲示したり、動作化を行って、状況を把握しやすくしたり、挿絵に吹き出しをつけて会話を膨らませたりしたいく。また、図画工作科において、自分が体操服を着ている全身の姿をクレパスで描く学習を行い、大きなくじらぐもの上に張り付けたり、音楽でくじらぐもの歌を歌ったりする活動を取り入れ、様々な方面からくじらぐもの物語の世界に入り込むことができるようにしたい。

国語の授業において、自ら発言することが少ない子どもたちを含め、全員が参加できる場をもつことができるようにするため、個人→ペア・グループ→学級など段階的に伝え合う場を設けていく。

11. 学習計画と評価規準（全9時間）

時数		学習活動	評価規準
1次	1	おはなしを5つの ばめんに わけて、よんでみよう。 ○場面分け（1～5場面）を行う。 ○範読の後に続いて、指で追いながら音読する。 ○時・場所・登場人物が分かる言葉に丸をつける。 ○単元の学習計画と目標を確認する。	【話す聞く】①② 【読む】① 【関・意・態】②
2次	2	こどもたちと くじらぐもが おなじうごきをしているようすを よみとろう。 ○第1場面(p. 4, L. 1~p. 6, L. 6)を音読する。 ○くじらも、たいそうをはじめましたと、くじらがたいそうをはじめましたの違いを考える。 ○「～が…すると、□□も…する。」のところに印をつける。 ○くじらぐもが子どもたちの真似をしている部分の動作化を 2 役に分かれて行う。	【関・意・態】① 【話す聞く】①② 【読む】①② 【知・理・技】①
	3	くじらぐもと 子どもたちの かいわを、くふうして おんどくしよう。 ○第2場面（p. 6, L7~p. 7, L10）を音読する。 ○「」の使いかたと書き方を学び、マス目に合わせて書き写す。 ○「～が…すると、□□も…する。」を意識し、くじらと子どもたちが呼びかけ合っている様子を掴む。 ○「おうい。」「ここへおいでよう。」のくじらと子どもたちの声の出し方などを工夫する。 ○くじらに誘われた子どもたちの気持ちを想像して、挿絵に吹き出しで書く。	【関・意・態】① 【読む】② 【書く】①②
	4	くじらぐもに どうやって とびのったのか、よみとろう。 ○第1~2場面での学習を振り返る。 ○絵カードを用いて、くじらや子どもたちの気持ちを再確認し、読み方の工夫に生かす。 ○第3場面の挿絵を見て、気づいたことを交流する。 ○第3場面を音読し、ジャンプの掛け声を3つ見つけて番号を振る。 ○手を繋いで、三十センチ、五十センチなどの言葉に印をつける。 ○「いきなり～」を使って文章を作る。	【関・意・態】① 【読む】①②
	5	〈本時〉	
	6	くじらぐもの うえで、子どもたちは どんな おはなしを したのか、そうぞうしよう。 ○第4場面(p. 8, L. 1~p. 9, L9)を音読する。 ○自分の絵（図工の授業で制作済み）をくじらぐもの上に貼る。	【関・意・態】① 【書く】①

		○くじらぐもに乗った気分になって、子どもたちになりきって、想像した会話（「～が見えるよ。」「とっても気持ちいいね。」など）を吹き出しに書き、グループで話す。	【知・理・技】 ②
	7	くじらぐもと 子どもたちの おわかれのようすが わかるように おんどくしよう。 ○第５場面（p.10, L.1~p.11, L5）を音読する。 ○「おや、もう おひるだ。」という先生の台詞から、みんなが時間を忘れてしまう程、たのしい空の旅だったということに気づく。 ○子どもたちの挿絵に吹き出しをつけて、会話を想像して書く。 ○お話の中から好きなところを書き抜く。	【読む】 ①② 【書く】 ① 【知・理・技】 ①
3次	8	おんどくはっぴょうかいの れんしゅうを しよう。 ○グループに分かれて、工夫したい読み方を話し合う。 ○音読の練習を行う。	【関・意・態】 ② 【話す聞く】 ①② 【読む】 ①②
	9	おんどくはっぴょうかいを して、いいなと おもったところを つたえよう。 ○グループごとに発表を見せ合う。 ○気づいたことや感想を伝える。 ○本単元での学習のまとめを行う。	【関・意・態】 ② 【話す聞く】 ①② 【読む】 ①②

12. 本時の展開（第5/9時）

（1）本時の目標

子どもたちがくじらぐもに飛び乗ろうとする場面の様子や気持ちを読み取り、工夫して音読することができるようにする。

（2）本時で使用する教材・教具

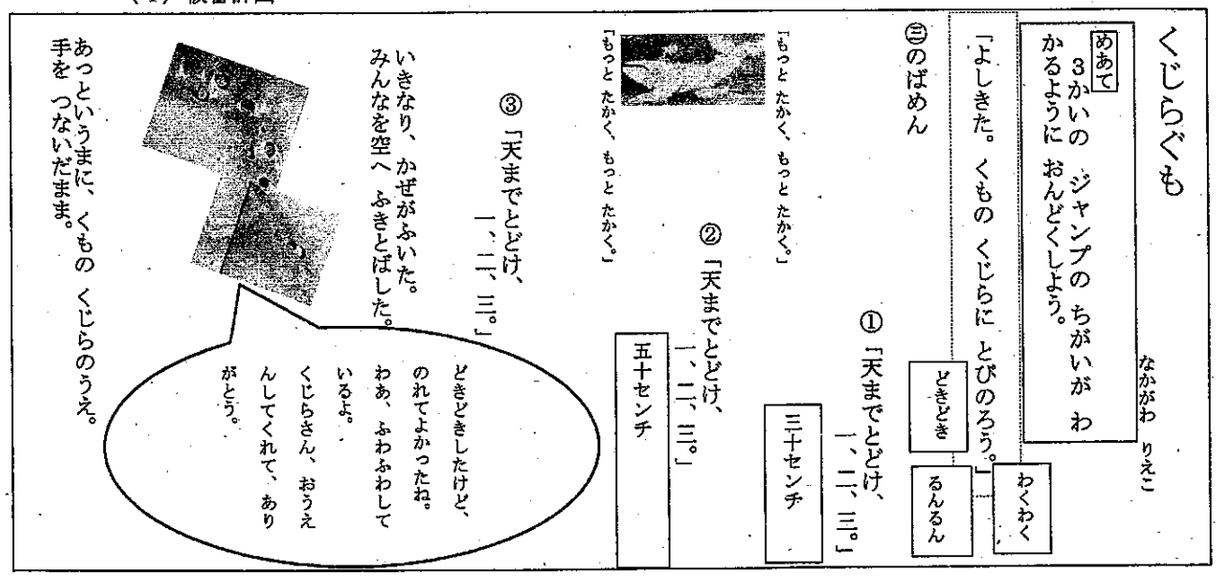
教科書、ワークシート、くじらぐもの模造紙、教科書の挿絵コピー、学習の記録

（3）本時の学習過程

	学習活動　○発問　・子どもの反応	指導上の留意点	評価（方法）
前時	1.　1～2場面を復習する。 「よしきた、くものくじらに　とびのろう。」 ・るんるん、わくわく　ピンク色の気持ち ・青色の気持ちの人もいるかもしれない。 ・1組や3組の子たちはいいなあって思っていそう。 2.　3場面の挿絵を見て気づくこと。 ・雲の上にみんないる。 ・手を繋いでいる。 3.　3場面を音読し、とぶ時の掛け声を3つ見つけて①～③の番号を振り、30センチ、50センチに丸をつける。 4.　いきなりという言葉を用いて、文章を考えることで意味をつかむ。	・「楽しみ。」「早く乗ってみたいな。」などの前向きな気持ちだけでなく、「雲に乗れるか心配だ。」などの不安な気持ちも取り上げる。 ・「雲は水だから乗れない」という声もあるが、物語の世界に浸る良さや、くじらぐもが誘ってくれているから大丈夫などの声掛けを行う。 ・くじらぐもに のりたい気分を高める。	

導入 5分	1.　「まねっこまねまねくじらぐも」を、動きを付けて歌う。 2.　前時を振り返り、本時のめあてを知る。 三かいの ジャンプの　ちがいが わかるように　おんどくしよう。 3.　座ったままで、第3場面を音読する。	・机の上は、教科書のみ。 ・音読の姿勢を作らせる。（指指しやカード※を用いる子は、教科書を机上に広げたまま読んで良い。） ※詳細は児童観欄に記載。	
展開 I 読み取る 10分	4.　子どもたちが手を繋いでとぶわけを考える。 ・みんなでとぶと、高くとべそうだから。 ・誰かが落ちないよう。 ・とべない子は助けてあげる。 5.　1回目のジャンプについて ・1回目は30センチとびました。 ○たった30センチしかとべなかったんだね。どんな気持ちになったかな。 ・〔しょんぼり〕まだまだ届かないなあ ・〔え～～！〕もっととべるとおもったのにな。 6.　2回目のジャンプについて ・こんどは50センチ ○こんどは50センチとべたんだね。どんな気持ちになったかな。 ・〔やったー〕少し高くとべたよ。 ・〔わくわく〕くじらに近づいてきた。	・画用紙（30センチ） ※cm は学習していないため、画用紙で示すことに留まる。30センチでは、まだまだ空に届かない高さだという感覚が持てるようにする。 ・画用紙（50センチ） ※1回目よりも高くとんだこと、それでもまだ空には届かない高さであることを	

	◎どうして、諦めずに子どもたちはジャンプできたのかな。 ・くじらぐもの上にのりたいから。 ・くじらと一緒に遊びたい。 ・諦めたくない。つよい思いがある。 ・くじらが応援してくれているから。 ・〔どきどき〕もっと高くとんでみて ・〔るんるん〕一緒にあそびたい。 ・〔うきうき〕早くこっちに来て！ 7. 3回目のジャンプについて ・いきなり風がみんなを空へ吹き飛ばした。 ・手をつないだまま、気づいたら雲の上。 ○1回目から3回目へ思いはどのようになっている？ ・どんどん強く（大きく）なっていく。	感じる。 ・絵カードを用い、気持ちを考えることが難しい子どもも考えやすくする手段とする。 ・なぜそのカードが適切であるのかも理由を問う。	手立て B→A ・なぜその読み方をしたのか、文中や板書、絵カードから根拠を求める。 ・どんな思いで3回のジャンプをしてきたか振り返る。 C→B ・自分の成功体験を振り返らせる。 ・1回目で諦めなかったのは何故かを再度振り返る。 ・絵カードの表情を手立てにする。
展開Ⅱ 表現する 25分	8. 自分たちもくじらぐもに乗れるように、班で読み方の工夫を考える。（声だけ） ○3回のジャンプの違いをどうすれば音読で伝えられるかな。 ・だんだん大きくする。 ・はじめは30センチだけだったから小さめ。 ・3でジャンプするために、いちにっさ～ん！と言おう。 9. いくつかの班は全体の前で示し、工夫を共有する。 10. 全体で手を繋いで動作化する。	・自分たちがとび乗れるようにと語りかける。 ・動作を付けると飛びかたに集中してしまうため、始めは声だけでおこなう。 ・グループで行うことで、言葉に表したり、自分だけでは全体発表で自信が持てない子も参加できるようにする。 ・手を繋いで飛ぶため、頭を打つなど、怪我をしないよう、注意する。 ・3回目のジャンプで、かぜの音を流し、模造紙（子ど	（活動中の様子、ワークシート） ☆評価規準 A:1回目～3回目の違いを、読み取った心情などを根拠にとらえ、表現しようとしているとともに、ワークシートにはくじらに乗ることができたときの気持ちを書くことができる。 B:3回のジャンプの読み方に、何らかの変化を付けようとしているか、 ワークシートに雲に乗ることができた気持ちを書くことがで

	11. くじらぐもに乗ることができた、自分の気持ちや、子どもたちの気持ちをワークシートの吹き出しに書き、交流する。	もの絵がくじらの体に貼ってある）をめくり、雲の上に全員で飛び乗ったような感覚が得られるようにする。 ・机間指導を行う。	きるのいずれかを達成している。 C:3回のジャンプに変化をつけようとしないこと、及び、ワークシートに空に飛び乗った子どもたちの気持ちを、書くことができない。
振り返り 5分	12. 第3場面を音読し、学習前との違いを感じる。 13. 学習の記録（◎○△の三段階の振り返り）を記入し、提出。	・同じ台詞でも、読み方を工夫すると気持ちや様子が伝わる。 ・手を離さず、みんなで一緒にとんだから、くじらぐものところまで行くことができた。	

（4）板書計画